

中村学園短大 石橋 葉子

目的 縫製作業の疲労については、過去に種々の場合について報告を行なっているが、今回は、各年代別に、機能検査を行ない、自覚症状を調査したので報告する。

方法 時期及び調査地、1977年8月下旬、佐賀県神埼郡、1978年7月下旬、福岡県甘木市、1979年8月下旬、福岡県久留米市、にある縫製工場でそれぞれ1週間行なった。被検者、40才代10名、30才代6名、20才代8名、の健康な成人女子、測定調査項目、i) フリッカー値、ii) 数字判別検査値、iii) 疲労感、iv) 自覚症状、測定調査時間午前と午後の作業前後（8時、12時、13時、17時）の計4回、但し、フリッカー値のみは午前と午後の中間に測定回数をふやし、計6回測定した。

結果 i) フリッカー値と数字判別値は、各年代とも同じような経過で低下した。低下の大きいのは、フリッカー値では30才代、40才代、数字判別検査値では40才代であった。経過時間と年代とを要因とした検定の結果では、両者とも2つの要因に有意な差はあらわれたが、交互作用には有意差はあらわれなかった。

ii) 疲労感と自覚症状訴え率は、20才代が高く、40才代が低かった。年代間に差はみられたが、交互作用に差はあらわれていない。